

# No.13 田中 信太郎 「風の吹く場所」

Shintaro Tanaka

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 11月 1日付 立川市市報記事より

「風の吹く場所」と名付けられた田中信太郎の作品は、どんなに静かで風がない日にも、ペDESTリアンデッキから見ると、てっぺんの青銅色をした卵形が、かすかに揺れていることがわかる。街にはいつも風が吹いている。そして季節のない都会では、風だけが季節を教えてくれるものなのだ。

建物の角、ドライエリア上に設置されたこの作品は、鋼鉄と2本のステンレススチールを3つの卵形がつないでいる構造になっていて、そのバランスは実に微妙だ。その構造の計算は、危なくもなくしかし美しくという、都市の構造物でありながら美術品であるというギリギリのところで考えられている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

春の野辺に、むせかえるよう霞んだ満開の桜。盛夏の庭先に、ピンクに燃える百日紅の花々。黄金を敷きつめたような、晩秋の銀杏の小路。木枯に耐える、冬の裸身の木立。自然の造形は、ある一瞬の時だけを待ちこがれたように、己の最も特異とする風情を人々に定着させる。

人為の果てにありながら、自然そのものへの昇華を夢みる、私の彫刻。

あたかも風景をながめるように、柔軟に視界へと導かれ思考と伝達を中断しながらも、はりつめた感覚のそれは、唯“佇む”

彫刻に意味があるのではなく、それを垣間見た、隙間に意味が宿る。それは記憶だけを意識に沁み込ませるといふ他動性への接近。

見えているのに、視えない多くのものたち。昼が夜に、すって変わる薄暮どきのゆらぎのように。夜が朝に移行する茜さす東の間のゾーンのように。

瞬時と永続のはざま。抽象と具象のハイブリット。饒舌と沈黙の同居。矛盾した理念とあいまいな感情を内包した揺れ動く彫刻。右の眼で、刻の乖離と季節の推移を。左の眼で、彫刻を凝視しよう。

遠い距離での限りない反復の対話。無為と作為の両翼にまたがってシンクロした多焦点のイメージの視覚化。

空白の時間。不在の空間。裸形の彫刻。不透明な気流。

“風の吹く場所”